

■学位論文内容要旨

自閉症児の母親が家庭で行う療育

—自らの体験を踏まえて—

崔 仁貞 (2019年度修了)

【研究背景と目的】

自閉症という障害は、何らかの脳の障害に起因する発達障害であるという認識は共有されているものの明確な治療方法は未だにない。しかし、適切な働きかけによって症状が改善することは可能である。そのため自閉症は治療というよりは療育を通して改善が図られている。

療育を行う場所は療育センターや学校などが一般的であるが、自閉症児が一番多く時間を過ごす家庭での療育こそ自閉症の問題の改善にとってとても大事な一環である。なぜなら家庭での療育は子どもに安心できる環境を提供し、子どもに合ったペースや方法で療育を進めていくことができ、さらに、親が子どものことを正しく把握することもできるからである。

問題は家庭で療育するということが育児を担当する母親が主の担い手になるということである。蓬郷ら(1987)は自閉症児の母親のストレスについて、自閉症児にみられるコミュニケーションや社会性の問題が母親のストレスを増大し、母親の精神的な負担感が大きいと指摘している。それ故に自閉症児の母親にはあまり負担をかけない、家庭で無理なくできる療育方法が必要である。

そこで本研究では筆者が日常生活の中で、自閉症児の息子Sに対して行った働き掛けを通して、日常生活の中でも無理なくできる働き掛け方を探ることを目的とする。

【研究方法】

1. 文献研究

自閉症の概念や自閉症の障害特徴に対しての理解を踏まえてからの自閉症児への働きかけを考えなければならぬため、まずは文献研究を通して、自閉症の定義や、自閉症障害特徴などについてまとめる。

2. 自閉症児の息子Sに対しての筆者（母親）の働き掛けについての研究

筆者と息子Sの日常生活の中で現れる様々な問題と筆者の働き掛けについての考察を通して、生活の中で無理なくできる自閉症児の母親の有効な働き掛け方を探る。

【結果と考察】

1. 文献研究

どのような家庭療育をするのがよいかを検討する前に、まず自閉症とは何かについて理解を深めなければならない。よく誤解されるが、自閉症は健常な子どもが何かの原因で人との関わりを避けるようになるのとは別のものである。かつては親の愛情不足に問題があるという時期もあったが今は否定されている。今日になってやっと自閉症は先天的な脳の障害（発達障害）の一種であることが分かってきた。「社会性の障害」、「コミュニケーション障害」、「常同性、固執性（興味や行動の限局性）」

は自閉症の三大特徴であるが、この三つの障害は孤立しているのではなく密接な関係を持っているのである。「コミュニケーション障害」、「社会性障害」と「常同性、固執性（興味や行動の限局性）」を共に改善することを考慮しなければならない。

2. 自閉症児の息子Sに対しての働き掛けについて 考察

日常生活の中で現れる様々な問題と筆者の働き掛けについての考察を通して自閉症児の母親が家庭で無理なくできる療育についてまとめて見た。

2-2. ABA療育方法から得た家庭療育のヒント

ABAは自閉症児に興味を示すほうびを媒体として、もともと人に興味関心が薄く、社会性や、コミュニケーションに支障を持つ自閉症児の注意を引き寄せ、人と接点を持つようにした。更に、人との接点を持つことから、興味関心を物から人に寄せられるようにし、社会性やコミュニケーション支障の改善を図った。

このように、筆者がSと行ってABA療育方法には自閉症児の母親が生活の中でどのように自閉症児の子ども

に働き掛けたいかについて様々なヒントがあった。特に問題行動の改善にはとても有効的であった。

2-2. 日常生活の中でのコミュニケーション支援

Sが興味関心を表す時、その興味関心に沿って、子どもの行動を観察しながら、子どもの自発的行動を見逃さず、即時に強化した。自閉症児の母親にさほどの負担をかけることなく自然の文脈で行動を強化することが可能になった。更に主導権を子どもに与えることができ、子どものモチベーションを高めることもできた。

そして、毎日繰り返す生活場面ではパターン化した声掛けで、言葉を理解しやすくし、体験を繰り返すことで、習得するようになった。

また、Sの興味関心を広げるために、少人数でできる、簡単な遊び方を導入し、「楽しかった」経験を積み重ねるようにした。新しい遊びを通してSは人とのやりとりの楽しさを分かるようになり、自ら遊ぼうと誘うことが増えた。

以上のような働き掛けを通して、Sは様々な変化を成し遂げた。それまでの問題行動の改善や、新しいスキルの習得だけではなく、人と関わることに抵抗感がなくなり、自ら関わろうとするようになった。